一行が宿に戻った時点から、少しだけ時を遡る。
宵闇の中、『パルバ』の街の南口。
並び立つ広葉樹の陰に、ふたりの黒ずくめの人間がいた。
黒ずくめのひとりが、自分の背後に控えている、大きく黒い塊をちらりと見る。
視線を受けた黒い塊は、重々しい唸り声を上げ、牙をむき出しにした。
「行け」
黒ずくめの合図で、黒い塊が街の中へと駆け出していく。
「わあああああああ!!」

「何だ？」
突如として聞こえてきた悲鳴に、ネックは窓に駆け寄って開け放ち、外を見た。
街灯の立つ眼下の道を、数人の人々が北へと走っていた。
誰もが怯えた表情で、まるで何かから逃げているようである。
「どうした」
ノランがネックに並び立つ。
「わからない。……けど、ただ事じゃないみたいだ」
窓を閉めながらネックが言って、
「ちょっと見て来る」
「俺も行く」
「リアムとノアは、ここで待っててくれ」
「二人とも！」
リアムが怪訝な表情で声を上げると、ネックが笑ってみせる。
「無茶はしないよ」
ネックは脱いでいた上着を羽織り直して、ノランと共に部屋を出て行った。
「……もう！」
頬を膨らますリアムを背に、ノアが窓の外を見つめる。
ネックとノランが、人々が逃げて来る方向へと走っていく。